

ほんのたまごミニコミ紙

miniたま (みにたま)

2020.12 第119号

コヤ



YouTube JP

コヤちゃんねる



YouTube 始めました！本や映画のことをおしゃべりしています。

ぜひご視聴ください。YouTube トップページ検索画面から

『コヤちゃんねる』で検索していただければアクセスできます。

読売新聞の読者が選ぶ2020年日本10大ニュースが発表になりました(同紙2020年12月19日首都圏版朝刊に掲載)。

①新型コロナウイルス感染拡大、緊急事態宣言発令②東京五輪・パラリンピックが延期に③菅首相誕生、新内閣が発足④安倍首相、持病悪化を理由に辞任表明⑤志村けんさんが新型コロナウイルスで死去。著名人の死去相次ぐ⑥アニメ映画「鬼滅の刃」、国内最速で興行収入100億円突破⑦新型コロナウイルスで政府が全国小中高の休校要請⑧高校野球が春夏中止。プロスポーツ界でも延期や中止相次ぐ⑨将棋の藤井聡太七段が最年少タイトル⑩九州豪雨、死者77人。

10項目のうち、新型コロナウイルス関連のニュースが①②⑤⑦⑧と5つ。④安倍首相の退陣も、コロナ対策に迫られて持病を悪化させたのかもしれないから、③菅首相の就任も含めて、コロナ禍でなければ起きなかった事例だと言えるかもしれません。まさしくコロナ一色の1年でした。

12月1日に発表された2020ユーザー新語・流行語大賞も、年間大賞はコロナ関連の「3密」に決定。12月14日には世相を表す「今年の漢字」に「密」が選ばれ、清水寺で揮毫が行われました。

「密」というのは反対語が「粗」「疎」です。大ざっぱとか疎んじるの意味ですから、本来は親密、緻密の「密」のほうが望まれるはずですが、今年ばかりは逆になっています。

今が旬なこの1冊⑪

島田源一郎・他 著

「ブックオフ大学ぶらぶら学部」

夏葉社 2020年11月刊

表紙のコピー「みんな、ブックオフで大きくなった」が、この本の全てを言い尽くしている。ライター、古書店主、漫画家、ブックデザイナー、せどらー(説明不要か?)ら、ブックオフがなければ夜も日も明けない人たちが執筆したエッセーや漫画を、「大量生産・大量消費の申し子」がブックオフだと語る、夏葉社代表の島田氏がしっかり束ねている。

ブックオフが誕生したのは1990年。2020年で創業30年になる。30年と言えば、これはもう歴史である。古本屋と言えばブックオフしか知らない世代もいる。従来、古書店主たちから、時には冷ややかな視線を浴びながらも、ブックオフが長きにわたり続いてきた理由は何か。

こんなことを書いている筆者がいる。新古書店(ブックオフ)の均一棚のほぼ全てが「猿岩石日記」で埋め尽くされていた90年代半ばのこと。それが半年後のある日、「ドロズ日記」にとってかわられる。そこで筆者は気づく。「それらの本は、あるとき、どうやら一斉に廃棄されているのではないか」「ここにたどりついた本たちは、私が買わなかったらこの世から消滅してしまうことになりかねない」「捨てられる運命にある本を、私は助けてやりたいという心境にもなっていた」と。

ブックオフファンには、愛書家とは一味違った本への強い愛情があるようだ。

その愛情に満ちた1冊。(K)

発行 ほんのたまご

メールアドレス nasuka@hontama.com

著作権は放棄していません

本紙に掲載されている画像・文章の

無断転載を禁止します



たまたま本の話

第119回 出ず当てのない小説を書く

矢樹純

矢樹純(やぎ・じゅん)と聞いて、急いでネット検索をかけた方がいるかもしれない。これまでに刊行された小説は、実質的にわずか4冊という寡作のミステリー作家である。

ただし実力は折り紙付きで、2012年8月、デビュー作の長編「Sのための覚え書き かごめ荘連続殺人事件」が、第10回「このミステリーがすごい！」大賞の「隠し玉受賞」して注目される。そして2020年7月、前年に出した第1短編集の表題作「夫の骨」が、第73回日本推理作家協会賞(短編部門)を受賞する。

日本推理作家協会賞というのは、過去に同賞を受賞した作家や評論家が選考委員を務めている。いわばプロがプロを審査する賞であって、厳しい批評の目にかなった作品しか受賞に至らない。7月10日に行われたリモート記者会見では、京極夏彦代表理事(代読・北村薫立会理事)から「最初から高得点だった。文章に無駄がなく読みやすい、展開に無理がない、などの賛辞が寄せられた」と、「夫の骨」の受賞が報告された。

「夫の骨」は矢樹純の処女短編集である。そんな実力派がなぜ、これまでなかなか本を出せなかったのか。受賞に際して、筆者は自身のブログ「取り返しがつかない」2020年7月11日号で、次のように書いている。「自分はデビュー作が売れなかったために最初の版元では次作を出すことができず、その後、数年は野良作家として、出ず当てのない状態で小説を書いていました」。

そこでKindleの電子書籍で小説を発表していくが、なかなか買い手(出版社)が見つからない。「初めに長編を書き上げて、ある出版社の方に読んでもらったのですが、うちでは出せないというお返事で、そのとき

に『短編を書いて力をつけた方がいい』というアドバイスをいただき、短編を書き始めました」。「出ず当てのない状態で小説を書くというのは、一度、作家としてデビューしている身としては、結構つらかったです。『何でこんなことになったのか』と、デビュー作が売れなかったことや、その他、諸々の運命を呪いました」と、筆者はブログで心情を綴っている。確かに、出版する当てのない作品を書き続けるほど辛いことはないだろう。不遇の時代が何年も続いたわけである。

ただし、自分が書く小説には手ごたえを感じていたようで、「本当に書くほどに力がついていくことと、自分の書く作品が面白いと思えたことだけが救いでした。これはいつか、絶対に形になる、世に出せると信じて書き続けました」。やがてそれが実を結ぶ。月に1本書くと決めて約1年間、書き続けた短編が13本ほどになったところで、エージェントを通じて、「これらをまとめて短編集を出しましょう」という出版社が現れた。祥伝社である。

こうして2019年4月に祥伝社文庫から刊行された第1短編集「夫の骨」には、表題作など粒よりの9編が収められることになった。同書は書店員や読者の口コミでじわじわと売れ行きを伸ばし、版を重ねているという。では「夫の骨」はどういう小説なのか。本のカバーには、こんなあらすじが書かれている。

「昨年、夫の孝之が事故死した。まるで2年前に他界した義母(注・孝之の父の後妻)佳子の魂の緒に捌め捕られたように。血縁のない母を『佳子さん』と呼び、他人行儀な態度を崩さなかった夫。その遺品を整理するうち、私は小さな桐箱の中に乳児の骨を見つける。夫の死は本当に事故だったのか、その骨は誰の子のものなのか。猜疑心に囚われた私は……」。

ミステリーなのでこれ以上の説明は避けるが、著者のブログによると、短編集のコンセプトは「家族の歪み」と「どんでん返し」とある。なるほど、最後の最後まで展開が読めない意外な結末が、「夫の骨」だけ

でなくどの物語にも用意されている。これらの「どんでん返し」は見事な出来栄で、日本推理作家協会賞(短編部門)受賞も十分に納得できる。けれども、読後感はスッキリしない。本格ミステリーだから、もちろん謎は解かれるが、後味が悪い。9編ともに、すべてが明らかになって「ああ良かった」とカタルシスを得られる物語ではない。こういうのを「イヤミス」と呼ぶのだろうか。

イヤミスについて、ネットにはこういった説明が書いてある。殺人などの事件が起きても、最後には事件解決！ 読者がスッキリと満足感を得るのが、今までのミステリー小説に多かった傾向である。しかしイヤミス小説は、事件だけでなく人間の奥に潜む心理などを描写し、見たくないと思いつつも読み進めてしまう、嫌な汗がたつぷりとなるような後味の悪い小説のことを指す——と。「夫の骨」もそれに当てはまる。

この後味の悪さは、筆者の言うもう1つのコンセプト、「家族の歪み」に起因するものだろう。人もうらやむ理想の家族であっても、何かしらの問題を抱えている。家庭内の問題だから、他人にはなかなか相談しにくい。親と子だからすべて腹藏なく話せるかというと、そういうわけでもない。したがって家族の問題は、根が深く複雑化することが多い。そんな家族関係の領域にメスを入れるミステリーなのだから、イヤミスになるのも当然だろう。「夫の骨」以外の短編も、家庭や家族を描いた小説を読んでいるつもりが、いつの間にか暗い過去が掘り起こされてきて、驚かされることが多い。

矢樹純のプロフィールを見ると、「1976年、青森県生まれ、弘前大学卒業。結婚・退職を機に、作画担当の妹・加藤缶とコンビを組み、自身は原作を担当して、2002年に加藤山羊の共同ペンネームで漫画家としてデビューした」とある。実生活では3人の子供を持つ母親でもある。漫画家と母親としての長いキャリアが、本格ミステリーにしてイヤミスの傑作を生む原動力になっているに違いない。(こや)